

---

# **勇者のまなびやつ！**

紅月 空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者のまなびやつ！

### 【Zコード】

N8275W

### 【作者名】

紅月 空

### 【あらすじ】

世界に“魔物”があらわれ、約100年後。人は、魔物に対抗できる魔法をみにつけ、勇者を量産することをきめた。

その学校こそ、勇者育成学園。

チート能力をみちながあらも低レベルクラスの俺は、日々魔物駆除をしながら、親友ヤシロ達と学園生活を送っていた。

成績なんてどうでもいい。俺はゆっくり毎日を過ごすのだ。



## プロローグ

「これで任務完了、か」

後ろで魔法撃つてただけの俺や他の同級生一人はほとんど無傷で済んだが、前線で刀を振り回していた同級生（ソラくんだけ）は、返り血を浴び、足から出血をしていた。俺が治癒呪文をかけると、すぐに傷は癒えた。

「何回やっても気持ちのいいもんじゃねえな」と、同級生の一人がいう。同感だ。

いくら魔王とはいって、イキモノをこらすのは気持ちのいい気がしない。特に、弱い奴に複数で挑むのも、だ。

「そういうやコウ君はこれで何体目?」何体、というのは、魔王のことだろう。

同級生の女子の聞き飽きた質問に、素直に答える。「4体目だな」

「えっ?嘘つ!」嘘じやないって。

はあ、やっぱこんなんだから、いつまでたつてもロランクなんだらうつか……。

魔王一体につき、何人の勇者が必要なのか。それは、勇者自信の能力で変わってくる。

すごく強い勇者なら、一人でも魔王を倒せるだらうし、逆に仲間の力を借りないと倒せない勇者もいるだらう。

逆にいふと、強い勇者が4・5人いれば魔王なんてあつさり倒せなのだ。

それを実現するためについたのが、「勇者育成学園」という国立

の学校である。国が作ったと俺でもわかる、何のかっこよさもないネーミングだ。人々の間では“勇学”と略されることが多い。

簡単に説明すれば、生まれて12年—（つまり12才）で入学でき、20才までそこで勇者としての知識・実力を養い、一般的教養も学ぶ学園である。まあ、魔物退治も請け負う機関だが。

しかし、勇者の素質を持つ人間は数少なく、ほとんどが国のデータで選ばれ入学させられる。つまり、勇者になりたくてはいるのは難しく、なりたくもないのに入学権利を得られてしまう奴のほうが多いのが現状だ。

そしてこの俺、“不知火優”<sup>しらぬい ゆう</sup>は、後者でありながら入学した生徒の一人である。学費が安く、国の支援もあるから、と母が入学手続きをしたらしいが、とんだおせつかいである。戦いは嫌いだから。だがいまさらやめる訳にもいかず、むりにでもこの学園生活を楽しもうとしているのだが……。

## プロローグ（後書き）

初投稿ならびに、初めてしつかり書いた小説です。読みにくいかも知れませんが、暖かいアドバイスがいただけたら幸いです。  
さて次回、魔王の数とは、学園の意味とは。そこらへんをかけていきたいとおもっています。こうご期待！

## 寮にて

“勇者育成学園”の開校。それは、およそ200年前にさかのぼるらしい。

地球上突如現れた、魔物といわれる怪物たち。そして、それを操る魔王の出現。

世界政府は、全軍事力をあげて立ち向かい、人類と魔王軍のにらみ合いが続いた。

そんな中、世界に「魔法」を使えるものが出現しはじめる。その魔法使いたちは、圧倒的な力で魔王軍を消滅させた。人々のあいだで語り継がれる、勇誕の日だ。

それから、政府は次々とあらわれる魔物と魔王に対抗すべくある学園を作った。それが「勇者育成学園」である。

「勇学」と略されるこの学園では、魔王があらわれたとき、任務として学園から4人1組の“パーティ”が派遣される。

そして、魔王にもランクがあり、弱い魔王はロランク、そこから強くなるにつれC、B、A、AAAとランクが上がっていく。勇者候補生も同様にだ。

そして俺は、ロランクのため、ロランク魔王の任務に派遣され、寮にもどってきたんだが……。

「あ～、だりいだりい。疲れたー。明日授業休もつかなー」魔王退治の次の日が授業など、ふざけてると思つ。

「そんなんだから、単位おとしてロクラスなんだよ。もっと努力し

て、Bくらいは目指さないと駄目だよ？」

「いっは同じ寮の御船社。みぶねやしろAクラスだ。2人で1部屋なのだが、ランクは関係なく入学順で割り振られる。社も俺と同じ16才だ。「と、いわれてもだな。俺は勇者を希望してる訳じゃないし、第一戦いは嫌いなんだ」

「実力は、Aクラス並なのにどうしてこうなるのかな……」へつ、お世辞は聞き飽きたぜ。

だいたい、魔王がこんなにいるのがおかしいんだ。昔のあーるぴーじーとかいうゲームでは、魔王一体が常識だったらしいぜ。今は、いろんな規制で魔王ができるゲームなんて売られてないが。

「そうはいっても、これは遊びじゃないんだよ？ 真剣にしないと、命も危険だし」

「あ・もう、うつせえ、俺もう寝る…おやすみ！」

俺はそういうと、布団に潜り込んだ。説教なんて聞いてられつかましてや同級生の説教なんか。

そして俺は眠りについた。

「優、勉強机整理しとくよ？…あれもう寝た？」

## 寮にて（後書き）

短くてすいません。次は長く書きたいと思います。  
感想どんどんください。では。

鬼の授業と女子生徒！？（前書き）

11/6日に改稿しました。

## 鬼の授業と女子生徒！？

時間割 6月×日

- |         |                             |
|---------|-----------------------------|
| 1       | - 接近戦実習                     |
| 2       | - 勇者学                       |
| 3       | - 魔法学                       |
| 4       | - 薬物学                       |
| 昼食（10分） |                             |
| 5       | - 剣術指導                      |
| 6       | - 魔物学                       |
| 7       | - 補習                        |
| 8       | - 補習                        |
| 9       | - 補習                        |
| 10      | - 補習（7・8・9・10は5時から9時まで。他の補習 |

者はいないから、そのつもりで）

「……なんだよ、コレ。俺の好きな遠距離授業ないし、第一補習俺だけじゃん！」

「……わざわざつくるからだと思つよ？」いいんだ、社つっこまないでくれ。

（やしき  
社が持つてきた時間割、それは地獄への案内図のようだった。）

優にとつて、だが）

そして、なにより補習がおおい。逆に、優が田植している魔法使いになるための、授業が少ない。

（しかも補習は、俺だけ、という話である。おー。

（やしき  
「これじゃ、最低でも10時に寮にもどらへることになるな」  
そもそも、俺だけってのは、やっぱおかしい……。みんなさぼつてないのか？そんな青春でいいのか？

「優、それは駄目人間のいうことだよ…」

「つるさい、うるさいーー！補習なんてやつてられつかー！やすんでやるーー！」

「ダメだよ。今日くらいはいいかないと、単位おとして留年だよ？」

正論である。実際問題1-5才からは、留年制度があるので。

おい、なんで社がそこまで気いつかうんだよ。

「なんでって…、そりゃ来年も優と一緒に学園生活送りたいもん」  
くつ、そんな言い方されるといがざるをえないじゃないか。  
社は男なのに、妙に接し方や動作が心をくすぐる。顔も中性的だし、初対面だと、性別がわかりずらいんじゃないだろうか。いやいや、待て。今はそんなこと考へてる場合じやない。今すべきなのは…

「仕方ないな。今日はいくよ、授業」あんなこといわれて断るのは

人間じやない。

「ホント？ よかつたあー」

「そこまで安心しなくても……。まるで俺駄目息子じやないか…」

「さぼりは駄目人間だと思うんだけど、つてかさつきいったね、これ

それより、授業の準備準備。

「あ、そうだね。ごめんごめん」

久しぶりってほどでもないが、接近戦実習は、ほとんど休んでいる。嫌いなもあるが、担当の九護教諭が（教諭より鬼先生のほうが、適切だらう）苦手なのだ。怖いのだ。

九護教諭、いや鬼は、問題をおこした生徒を生徒指導室で一日指導というのは序の口で、体罰はもちろん、あげく魔物討伐に一人でいかされたりするのだ。（先生もついてきてはくれるが）  
まさに、先生の鏡ともいえる先生である。

「優？ 普通そんな先生はいないし鏡つていえないんだけど……」「え……、まじ？」

まあ、物心ついたときからこの学園なんだし、世間一般の先生像なんてしらなくて当然か…。社は物知りだからしつてるのだろう。

まあ、とにかく恐ろしい教諭なのだ。

でも、社の頼みと九護の鬼指導から逃げることを天秤にかけた場合、社の頼みの方が格段に重い。うむ、頼みを断るのは駄目だ。

「ふつ、鬼指導なんか楽に乗り切ってみせるぜ！」「おお、かつこいいよ！優！」

1時間目の授業、簡単にのつきつてやるー。

## 1時間目

前言撤回。無理、もう死ぬ。

意気揚々と1時間目の接近戦実習の授業場所、すなわち戦闘ドーム（昔あつた東京ドームとかいうドーム一個分らしい）にいった優と社だつたが、九護は優に目をつけるなり、

「久しぶりだなあ、優。やつと出席するようになつたか。久しぶりで体もなまつたるだろ？ 特別メニューを考えてあるからじっくり体動かしていけよ」

と、いやな笑みをつかべながら言い放つと一枚のプリントを渡してきた。そのプリントの内容は何かと云うと、

腕立て伏せ300回、腹筋300回、ランニング、ドーム10周、竹刀素振り500回、などハードメニューの盛りだくさんであった。

いやしかし、コレどう見ても無理だろこの1時間で全部は無理だつまり補習か？補習なのか？などと考えている優にむかって、

「ふふつ、頑張りなよ?」と社の哀れみのこもった励まし。あげく、九護は、俺につきつきりで、休む暇もない。

他の生徒はどうすんだよ!

「心配するな。おまえみたこせぼる奴らじやない」皮肉たっぷりである。

30分後……

「ほりーあと、腕立て100回ー」「無理ひ、だつて、絶対つ、不可能」

「ゼヒ、ゼヒ、と息が荒くなるが、鬼のメニューは終わらない。

「次はワンニングだ」「無理だーーー!」

「南無ニ」「ドームの端で、十字をきる社やしきであった。

「……もつあんな教科うけない

「あはは……まあ休んでたのが悪いんだし、今度からは通常授業だつて」

「その通常授業だつて、やることほとんど変わらないだろ」

通常授業は、筋トレや体術などばかりで、接近戦をしないならうけなくともいい授業である。しかし遠距離戦志望の生徒も、1年は何回かは出席しないといけない、といつ最低ラインがあり、俺はあと6回ほどである。

「6回だよ? 6回。楽なもんぢやない」そつぱいづがな。俺は田つけられてんだよ。厳しいんだよ。

「つまり、たまつてもいいこと無いってことだよ

「もういい、聞き飽きた。次は勇者学だっけか。まあ、寝ておけばおわるな」

「聞き飽きたって口癖？つていうか、寝ちゃ駄目だよ！」

「おもしろくないんだから、寝ちまうんだよ。暇なんだよ」

「もう……。ノートとるくらいならできるでしょ？」

「あつ！ノート忘れた！ちょいとこりに戻る！」「えつ？ ちょ、もうチャイムなるよ？」「間に合わせる…」タツ！ 「……いつちやつた」

寮まで走つて30秒、授業まではあと2分か…。ギリギリ間に合つ！

寮から勇者学の教室は、幸いなことに近い。このままいけば間に合つ…はずだったのだが。

「おううわ！？」「へつ？」ドンッ…と曲がり角で、一人の女子生徒にぶつかつた。

女子生徒は、勇学の制服（カツターシャツと膝丈より少し短いスカート）をきており、ショートカットでこじ茶髪で…

「つてそんな場合じゃない！早くいかないと…」と、寮にいながらつとした優<sup>ゆう</sup>だが、女子生徒の教科書類が散らばつて居ることに気がついた。

「すまん！」優はすぐに教科書類を拾い、積み重ねた。

「急いでんだ。じゃあな！」

あと一分、というところで寮につきノートをつかんで教室までダッショウする。勉強道具整理しといてよかつたつ！  
あとは教室まで走るだけ！

勢いよくドアをあけ教室に入り、一番後ろの端っこにすわつたと同時にチャイムがなつた。ギ、ギリギリ…。

「あつ、間に合つたんだ。よかつた」と、斜め前に座っていた社  
がこちらを見て囁く。

だが、社の言葉に返事はしなかつた。いや、する余裕が無かつた。

なぜなら、やきほどびつかつた女子生徒が、隣の席に座つている  
からである。

「お前つ（あんたつ）さつきの…」

なんだコレは一体なんなんだ。どこかの漫画のワンシーンじゃね  
えかつ！いや、あれは転校生だったか……、いや、そうじやなくて！  
「さつきはすまんつ！」ととりあえず謝る。なぜとなりの席かが予想  
できたから。つまり、俺のせいでギリギリになつたのだろう。

「あのねえ、あんたのせいで遅れるといだつたのよ…？ホント、曲  
がり角では注意してよね…？」

「仕方ねえだろ！あれば急いでたから…」

「どうせ、忘れ物でしょ？　あんたが悪いんじやない！」

「2人とも、そこまで。授業中だよ？」

社のいうとおり、授業は始まつている。そして、クラス中がこち  
らを見ていた。

結局遅刻と変わんねえじやねえか……。

2時間目、これほど気まずい授業は初めてだ。なにせ、殺意の視  
線が隣から飛んでくるのだ。目をむけたら、殺られる。

一応ノートはとつたが、授業の内容はまったく頭にはいらなかつ

た。

### 3時間目 魔法学

「やつと得意授業だ」とつかうかもしていられない。やきほどの女子生徒がみてきているのである。

「ねえ、優。あの人となにがあつたの？」

社に一部始終を話した。

「へえー、それで…」

「なあ、あいつなんて名前なんだ？」

「ん、あの人？　あの人はたしか…“五月雨”さみだれ魅琴みこと”だったと思うよ」さすが物知り。

しつかし。どうしようか。ものすごく怒つてゐるっぽいなあ。ここは無視しどくか。そんなことを思ついたら…

「今日の授業は2人1組で、魔法の実習、つまり魔物退治をしてもらいます。実習ドームに移動してください。そこに魔物をだすので、ふむ、実習か。となると、下級ゴブリンとかを倒すんだろうな。ところが、またドームか…。2人1組は、社とでいいか。など、考えていたら、ドームについた。

「なあ、社、一緒に」といいかけたところで、

「ペアは同じランクの人と組むよ」と先生。

困ったな、ロランクで仲のいいやつはないし。まあ、ペアがない奴探して組むか。

といつことで、ペアあまりがでるまでまつてたんだが…

「まさか、お前あんたになるとは……」「

そう、話題の五月雨さみだれである。今日はつづけてないな。

「五月雨さみだれだけ。お前のクラスだのたのか」

「文句ある？ ていうか、なんで名前なまえしてんのよー。」

名札見ればわかるだろ、といつ返事をしたとたん俺の名札をジロジロみてきた。

「ふ、ふちび、すぐる？」

「とこどんまちがつてるな。まあ、優をすぐる、とか読まれること多い。ふちび、はさすがになかったが。

「なんて読むのよ…」

そこまでして聞きたいか。

「聞かないと、なんかあつたときに被害届だせないでしょー。」

俺をなんだとおもつてんだよつー。

「しらぬい ゆづ、だよ。覚えとけ」

「変な名前ね」ぶつ飛ばすぞ……。

「五月雨さみだれ、も珍しいと思つが？」

「一緒にしないで。びつせ、魅琴みことつて名前なまえも変だとおもつてんでしょ…」

「いや、普通にかわいいと思つが。ぴつたりの名前だの」「うー！」  
いや、じこな茶番ちばんやつてゐる場合ばあじゃねえ。案の定下級げきアブリンクも  
放たれてる。

倒しにいくぞ。

「い、いわれなくともわかつてゐわよー。」

10分後……

「あんた…、何なの？」驚おどろくのもむつはない。なにせ、俺がつかう魔法はAランクでも使えない奴は多い。（社は剣術をつかうから別として）

「この世界の魔法、というのは鍊金術にていて、氷の刃を撃つみたいな、氷呪文は氷を使用して使う。

やり方は、手のひらサイズの氷をもち、呪文を唱えて発動させる。火や電気も同様だ。

ただ、俺がつかう上級呪文は、敵をおしつぶすほどの氷をおとしたり、半径2メートルはあるうか、という火球をだしたり、雷おとしたり。こういうのは、修行をしてコツをつかまないと操れない。昔から、エアガンとか好きだった。つまり、遠距離攻撃がすきだつた。

この学園に入学して、魔法の存在をしつたときから、もう修行修行の毎日で、そのせいで授業にでていない氣もする。

今おれのまわりには、氷づけのゴブリン、ゴブリンの丸焼き、黒こげのゴブリンなど変死のオンパレードだった。まあ、こいつらは弱いし下級呪文うつてたんだけど、下級も<sup>きわ</sup>究めているから結構高威力だ。

「なんでそんな強いのよ…」まだ呆然としている五月雨。社も最初は驚いてたなあ。

「もしかしてあんた、『自由の魔術師』持ち?」

「うん。そうだよ」ワクワ　さんみみたいな言い方だぜ。

“自由の魔術師”、それは何千万に一人の確率で体に宿る能力である。

このラノベみたいな能力の効果は、だいたいの物質を魔法に使用できたり、魔法上達がはやかつたり、いろいろ研究で発表されてるが俺自身あまり知らない。知りたい奴は、社にきいとけ。

「それより五月雨、」「魅琴でいいわ」：ん?

「名前でよんていっていいっての!一回で聞き取りなさいよ!」

「そうか、じゃあ俺のことはユウでいいぞ」

「は？ 当たり前じゃない。どうして私が名前で呼ばせてあげるの？、  
こつちは名字でよぶのよ。わかるでしょ？」

なんで怒ってんだ？

「とにかく、ぶつかつたことは許してあげる。だからもう饭つかう  
のはナシ。わかつた？」分かつた。

「じゃ、今日の昼屋上でね。」「なんでだよ」「昼食でしょ。わか  
んないの？」

いや、わかるがいきなり一緒に飯くおうのはどうこう風の吹  
き回しだ？

「意味わからん、つて顔ね。いい？もうあたしたちは友達なの。」  
飯くらい一緒に食べるのが普通でしょ？」へー、もう友達なのか。  
怒つたり、友達宣言したり、忙しい奴だ。

「それはいいが、お前、女子の友達と飯くわないのか？」

「気があうやついないのよ。それに、あんたといたらおもしろそう  
だし、同じクラスでしょ？」

「そんなもんなのかねえ……。じゃあ、友達も一人連れて行くぞ？」

「えつ？ まあ、いいわよ……。好きにして」

おい、なんで残念がるんだ。

「こうして、新しい友達？ ができた。また口づるさじのが増えたっ  
て感じだがな。ま、美人だしいつか。

「あんた、今私についてなんか思つたでしょ」「なんでもねえよ

「ふふつ、仲直りできたんだ。一件落着だね」遠くから眺める社で  
あつた。

## 鬼の授業と女子生徒！？（後書き）

次回は、四時間目からはじまります。  
五月雨の紹介と社との出会いの回想、そんな感じでしょうか。  
次回「あの日の誓い」、お楽しみに！

## あの日の話 前編

4時間田は何事もなくおわり、約束の昼食である。社も快く返事をしてくれたので一緒に屋上に向かつ。

「屋上で待ち合わせだっけか」

屋上は俺たちの寮の階段をあがつて5階にある。国の設備ともあって、5階建ての寮はとても大ききれいだ。屋上からの眺めは、勇学があるナガノの街を一望できる。

このナガノのいう街は、ニッポン列島の中心近くに位置しており、東西南北どこに魔物の群れが出現しても対応できるようになつている。

「それにしても、めんどくさがりの優が、友達つくるなんて珍しいね」

「押し切られたんだよ。友達になりたいっていわれて断れないだろ」「ボクは友達に入ってる？ 優」

当たり前だろ。友達っていうより、親友の方が正しいくらいだ。

「ふふつ、よかつた」

社は嬉しそうに笑う。そんなやりとりをしてくるうちに屋上についた。

「遅かつたじゃない」もつきてたのか。せつかちなやつだ。

ミコトはもうきていて、至って普通のベールのマジトを広げていた。

「飯ぐうのにおおげさだな。そんなでかいの広げなくてもいいだろ」

「つむせこ。地面にそのままわつたら汚いでしょ」  
む、性格に似合わず清潔だ。「なにかいつた……」「いつてないつてない」

なんか心読まれてるな。いやいや、そんなことよつやるべから」と  
があった。

「紹介する。俺の同居人にして友達の御船 社だ」「よろしくね、ミコトさん」

「よ、よろしく……」

なぜか、緊張しているミコト。 そうか、社が美青年だからか。見惚れるのも無理ないな、うん。

「挨拶はこれくらいにして、食べようか。昼食の時間は短いし」社は腕時計を見て言った。

「そうだな、あと7分だし食い始めるか」「う、うん」 緊張してるな。もしかして、男2人だから居づらいのかな。うん、そうだな。

「おい、ミコト。もつとリラックスしろよ。飯が不味くなるぞ」「あ、ああ」

一言ずつしかしゃべってないな。どうしたもんか。

と、おもつていると、

「あ、ボク飲み物買つてくるね」と、社が気をつかつて屋上からでていった。そんなことしなくてもいいんだが。

「なあ、ミコト。社が苦手なのか?」

「いや、そんなんじやないけど……」

「男2人で遠慮してるのか?」

「へつ？ 男？」

まさか、女だとおもつていたのか。そんな、どこかのラノベじやあるまいし。

「ああ、社は男だぞ？ 正真正銘

「い、いつから友達だったの？」

「いつだったかな。たしか

## あの日の話 前編（後書き）

次回もお楽しみに。

11/6日に改稿しました。



## あの日の晩に 後編

……あれはたしか13才のころだったか。13才から寮生活が始まるのは分かるだろ？寮に行く奴はすぐないけど。

で、俺は寮にはいる少ない生徒の一人だった。そこで、社と同じ部屋割りになつたんだ。

7才から12才まで、友達なんかつくらないで、魔法の勉強ばつかしてたおれだから、どう話しかければいいか分からず1・2週間がすぎた。その間は男か女かわからなかつたな。

そして、ある日の課外授業。第7学年（13才）がいく魔物退治の授業だ。

俺は、同じ部屋の社とペアにされてナガノの端の森に遠征、ゴブリン10体の討伐という形で授業がおこなわれた。後で聞くと、先生が裏からこっそりついてきていたから危険は少ないらしいけど、そのとき先生はそこには生息していないはずの上級魔物をみつけて相手してたらしい。

先生が、もし上級魔物と戦つていなかつたらこの右肩の傷もつかなかつただろうし、社とも、友達じやなかつたかもしれない

無言だなあ、とつづづく思う。うらからついてくる社くん（たぶん男）はあまり話しかけてこないし、自分も話しかけるのは苦手だ。そのせいで余計に静かな森のなかをあるくのはこわかつた。ちょっと話しかけてみようかな……。

「なあ……」「何…？」「君って、剣術使うの？」「うん、そうだよ……」「…………」「…………」

会話が弾まない……。言葉のキャッチボール拒否である。

そしてじばりく進むと、

ガサツ、

「なんだつ？」 「ゴブリンかも…」

くっそ、ここででてきたら確實に厳しい。今使える魔法は、氷と火だが、森で火をつかうのは危険だ。

もつと開けた場所でなければ氷しかつかえない。

「氷が5個か…」

5個では、上手くいってもゴブリン5体だ。残りの5体を社くんにまかせるのは危険だろう。

そんな計算をしているあいだに、

「ギシュアーッ！」 「ジヤギューッ！」

3体のゴブリンが茂みから出てきた。

「つ！アイスピアッ！」

優の前に氷の槍が生成され、ゴブリンへと飛んでいく。

「グフヤツ！」と、2体の体を貫いたが、1体は残ってしまった。残りの1体が優に向かつて、持っていたこんぼうを振り上げ襲いかかる。

「くっそつ！」目をとじて痛みに備える。その刹那、ザシユツ！と

肉が切れる音がし、目をあけると、ゴブリンが倒れていた。その死体の前には、返り血をあびた社がいた。

「危ないよ！どうしてもう一発撃たなかつたの！」怒りが、しかし心配も混じつた声で怒鳴られた。

「わ、わりい」 「もしボクが斬つてなかつたら死んでたかもしないんだよ！」 「だから、ごめんつて」 「次はないと思ってね！」

そのまま2人は、また無言で進み始めた。  
なにもしゃべらなかつた。ただ無言で歩き続けた。

5分ぐらいたつただろうか。少し開けた場所へでてすぐに、茂みが音をたて揺れた。その音がどんどん近づいてくる。

同時にカラーン、カラーン、となにかの音も。

「さつきよりおおい…」 「ほら、構えて！」

『ギシヤアーッ！』と茂みから6体のゴブリンがあらわれた。そしてその後ろには……

「動く骨！？」

そう、それは動く骨、スケルトンだった。手に剣と盾を持ち素早い動きで接近てくる。

「アイススピアッ！」

優のはなつた魔法は、スケルトンのすこし右を飛び、一匹のゴブリンに当たった。

スケルトンが接近てくる。

「アイスウォール！」とさに氷の壁を作りスケルトンの動きを鈍らせる。

しかし、この時点で優は冷静さを失っていた。

アイスウォールは、氷を2個消費する大技である。つまり残った氷はあと1個。

向こうでは、社の周りに3体の死体が転がっており、ちょうど1体を斬りおとしたところであった。

社はつぎのゴブリンに向かっていく。とその背中へスケルトンが向かいだした。

「やらせるかつ！」

優はとっさに氷の壁を解除し、社にむかって走る。社は最後のゴブリンを斬ったところだった。

その社の背後でスケルトンが、剣を振りかざす。

「えつ！？」「間に合えつ！」

ザシユツ！「うぐつ！」

肩に激痛がはしつた。肩の鎧をつけていたので、腕が切り落とされることはなかつたが、鎧を碎いて剣が食い込んでいた。社の表情が、絶望の表情へと変わる。

「ゆ、優くん……」

社の目の前に優が立ちふさがっている。そしてその肩から、血がダラダラと……。

「ほんのあ……、これくらいで……、くたばってたまるか……！」  
ふるえる片手で、ポケットからライターをとりだし火をつけ呪文を唱える。

「エクスプロージョンッ！」

スケルトンの頭が爆発する。スケルトンは粉々になり、優は衝撃でふつとばされ近くの木に背をうちつけた。

「優くんっ！」社が近づいてきて、傷の手当てをする。

「ボクを……かばって……っ」社は、涙を流していた。

「気に……するなよ……、守られてばっかじや格好わりいだろ……」

今の台詞なかなかつかっこいいな、とか馬鹿なことかんがえてたら意識が遠くなってきた。

……死ぬ、のか？

\* \* \*

「ううん、ほんまはどうだ？ ベッドの上？

体を動かそうとしたが、肩に痛みが走る。

「いっつ！」 「あ、起きた！？」

む、社くんの声がする。となるとここは……、

「保健室だよ。先生が運んでくれたんだ」

横をむくと、社くんがいすに座つていた。目が腫れていた。泣いていたのだろうか。

「それにしても、ホントみかつた……、ほんと……」社の頬に一滴の水が流れた。

「お、おい。泣くなよ。俺の自業自得なんだし、お前だつて俺を助けてくれたじゃないか。貸し借りなしだる？」

「無理だよ……、あれぐらじやゼロにならなー」

「困ったな、これじゃあ泣きやまなー。よし、

「俺の友達になつてくれ」

「…………な、なんで?」

「それで貸し借りゼロ、つてことじや駄目かな…………」

「なにいつてんだ、俺。

「う、うんっ！いこみつー」

「はは、よかつた

これで、一件落着だな、社の笑顔をみながらそんなことをおもつ

ていた俺のからだに暖かな感触が。な、なんだあ？

「コウツー！もう今度から無茶しないでつ！約束してつー」

「社が泣きながら俺に、抱きついていた。

「や……、約束する……」とかなんとかいつたと思ひで、俺は。

「まあ、そういう訳で」と、一部始終をミコトに話したわけだが、

「…………」顔を赤くして、黙つて聞いていた。熱でもあるのか？

とヤバく、

「おーい、優ー、ミコトやーん、飲み物買つてきたよー」社が帰ってきた。

「おう、ありがと。今ミコトに、俺と社の友達になつたきっかけをだな」「えつ、あれを言つたの！？」おこ、お前も熱あるのか？顔が真つ赤だぞ。

その社にむかつて、

「ヤシロくん、あんたには負けないからつー」なにがだ。

「ねえ、優ーどこまで話したんだよ！」「お弁当つ、お弁当わけて

あげるわっ！」

「うるせえっ、飯食わせろおー！」

ナガノの街に、優の叫びが響いた……。

## あの日の誓い 後編（後書き）

「暁と編集長の後書き、はつじまつるふ――――――」  
「黙れ（バハラ）」「イト」

### 登場人物

作者 暁  
編集長 イ  
両名とも実在します。この中の一部のやつどつも、ありました。

「さて、後書きの始まりですが……。編集長、なんか怒ってる?」「お前……。活動報告でもうじぱりくせ、この作品をださないといつてただろう……」

「ふつ、あんな編集長の指図、つけるわけないだろ?」「なめてんのか」「ゴメンナサイ、バズーカしまつて?」この俺の部屋だから

「もつと上手くなるまで更新するなといったはずだが?」「いやいや、これには訳があるのよ」「どんなど

「まず、あの日の誓い前編、をだしたら、後編もださないとムズムズするだろ?」

「お前の作品にそこまで期待するやつはない

「グサツ!と、とにかく書いたんだからだしたかったの!」

「それはいいとして、お前の作品へのアドバイスがほとんど改行についてじゃないか。勉強しなおせ」

「よくわかんないんだよー」「ウザイ

「あなたは書かないからわからねえだろ……」「めんなさい、メリケンサックしまつて?」

「あと、今回の作品……。社がおかしいんだが……」「追求しないでくれ……。俺も夜中にかいたせいか、あとでもつて

くるはずのシーンを少年時代にいれたかったんだ」「そのせいでも最後無理矢理つぽくおわってるじゃねーか。てか、ど

つちにしろ書くつもりだったのか。あと、お前の恋愛小説の定義がわからん」

「わかつてないなあ。最近は男なのに女みたい、つてのがはやつてるんだよ。逆もまた同様」

「うん、つまりパクリ宣言だな」

「ちがう！ちがうよ！ちょ、携帯ビームにかけるつもり！？『あ、フミツ 文庫ですか？』ノオ——！やめてよ！訴えられるよ！裁判無理だよ！」

「大丈夫だ、俺が裁判員裁判に立候補してやる」

「有罪にする気でしょー！」「お、よくわかったな」「チクショー！」

作者が、現実逃避でゲームをし始めました。

5分後……

「とにかく、これがでたんだから、当分違う作品に専念するんだな？」

「（ゲーム中……）……へ、なんて？」「消す」

「ちょ、サラッと怖いこといわないでよー！」

「ふん、そもそもその作者名も変えたほうがいいだろう。特に壮羅

「まあ、それくらいなら……」

「あと、作品名も」「無茶いうな——あんたが考えりよー題名とかかんがえるのムズイんだぞ！ゼエハア、ゼエハア（息切れ）」「

「ナイスツツ」「ハミ」

「……本編より後書きのほうが評価されたりしないよな？」

「そうなつたら、あとがき作家になれ」「時沢先生かつ！」「し

つてゐる人少ないツツ ハハ。

「んで、このUSBにほいつてるプロットが次の作品のプロットなんだな？」

「イエッサー」「使い方違ひぞ」

「そのプロットが反対されても、『エ・おい、つまみ無視か』俺その作品かくから」「俺の判断も無視か！」

「だつて書きたいんだよ！それ」

「題名は？」

「メカニック、英語でかくかカタカナか迷つてゐ」「ないわ」「なんだと！」

「もつとかつ」いに題名にしねえと、ハッキングして投稿できないよつにするから」「理不尽だつ！」

「もつ、書く事ないだろ。こんなあとがき終わるぞ」「ちよ、それはひど」 プツツ

とこうわけです、はい。

編集長なんて、無視しちゃえー、といきたいとこですがね。

メカニック（仮）のイメージが脳を浸食していつて……、

同時並行つて手もあるんですが、よくよくカレンダーみたら、テスト期間が……。

点数わること、マイPCがリサイクルショップに並ぶので、テストは本氣でいかないと。

この長いあとがき、意味あんのかね？

## 田 覚めし影

梅雨合宿……、それは俺たち7回生の、大イベント。

A、B、C、Dのすべてのクラスが、別々の魔王支配地にいき、訓練などをする。

いわゆる野外実習である。目的はいろいろあるが、仲間との信頼を築く、というのが最大の目標らしい。

「というわけで、このしおりを見て、準備してよう」「元気だ。そういって、九護先生はDクラスの生徒に、梅雨合宿のしおりを渡した。

なになに？森にいってキャンプ、か。あつさりしてたなあ。

て、ちょっとまでよ……、これは……？

「先生、釣りとかキャンプファイヤーって遊びじゃないですか？」

クラスの一人が訪ねた。俺もきたかったところだ。

「もう、それか。それは校長が決めたんだ。まあ、なんらかの目的があるんだろう」

なるほど、あの校長がきめたなら無理もない。

何代目かはしらないが、今の校長、朱雀校長は、イベントが大好きなのだ。

去年の秋の、仮装大会は、誰にとっても苦い思い出であるはずだ。

「とにかく、1週間後だから、準備はしておけよ

「ヤシロはまだ合宿なんだ？」

「僕は海沿いだよ。釣りとかするらしいんだ」

「俺も釣りあるだ。校長釣り好きだなー」

夜の10時をこえ、俺は寮でヤシロとそんな会話をしていた。

「あ、ユウといけないの、残念だなあ」

「確かに。授業は一緒に」

この学園の授業は、A・B・C・Dの各クラスから、決められた人数が集まって1グループとなり、授業を受ける。

下位のクラスが上位のクラスを見て、成長できるようにそんな制度になつていてるらしい。

その制度のおかげで俺はヤシロと一緒に授業をうけられるのだが。「ユウが行く森って、北の森だよね」

「ああ、そうだが?」

そういうと、ヤシロはとても険しい顔になつた。

「……その森、でるらしいんだよね……」

「……はあ?」

なんだ、怪談か?ヤシロがそんな話に興味をもつとは。

「僕のクラスの人から聞いたんだけどさ……。夜中にその森で、人影が何かを探し回ってるらしいんだよ」

「……ふーん」

「でね、そのクラスの人は怖くなつてすぐ帰つてきたらしいんだけど、あんな魔物だらけの森に人影なんておかしいよね」

「魔物じゃないのか?」

「それが、絶対人だつたっていうんだよ……」

「へえ。つてその人はなんで森にいつたんだよ」

「落とし物を捜しにいつたんだつて」

「よくわからん話だな」

「とにかく、ユウも気をつけてね」

そういうて、グイと迫つてくるヤシロ。

「わ、わかつたから。もう寝る時間だ」

「あ、ほんとだね。お休みー」

「ああ、お休み」

俺は電気を消し、ベッドにはいつた。

そして、俺はすぐに眠りに落ちた……。

一方、北の森では……

「んうう。眠いなあ。誰？俺様の眠りを妨げるのは……」

「……やつと見つけたぞ」

「あんた誰？」

「少しこそな人影が、2倍もあろうかという人影に問い合わせる。  
「ふん、そんなことはどうでもいい。さっそく俺の役にたつてもら

うぞ」

「……はあ、なんで俺様があんたの手伝いしなきゃなんないの？」「誰が貴様の封印をといたと思つて」

「気持ちよく寝てたのを無理矢理起こすような人とつきあいたくな  
いね」

少しこそな人影は、そういうと右手をもう一人の影に向けた。  
その刹那、夜の森に、紫の光が輝き、衝撃が森をざわつかせた。  
そして、辺りがまた静かになつたときは、影は一つになつっていた。  
「ふう、この程度で僕の封印をとこうなんて、バカだねえ」

小さな影はそういうと、森に向かつて歩き始めた。  
そしてつぶやいた。

「さて、俺様の世界征服計画、第2楽章の始まりだ。わかってる、  
封印されるなんてドジは、もつふまないよ……」

## 三覚めし影（後書き）

長い間があわ申し訳ない。  
もう一つの小説かいていたら遅くなりました。  
さて、今回の話の最後に、怪しい影が登場します。  
影の正体はいかに！  
次回、勇者のまなびやつ！、第6話 「梅雨の宿」  
次回もお楽しみに！

「ううそ、ううと茂る木々。あふれるマイナスイオン。

俺たちロクラスは、梅雨合宿地の北の森にきていた。

「すごい山奥ねえ～。こんなところに3日間とか拷問よ、拷問」「森に向かうための飛行船（地上は魔物が危ないので、バスなどはつかわれていない）から降りたミコトの、第一声がそれだった。

「合宿なんだ、当たり前だろ？」「

「そうはいつもね。あたしは女の子なのよ？」

「女の子だからいろいろとアブナイんだ、と田で訴えてくる。やれやれ。

「大丈夫だ。お前みたいなのを襲うような奴は、このクラスにはいないからさ」

「……あとでぶちのめす」

軽い冗談だったのに、ミコトはとてもなく恐ろしい形相でこちらをにらんでいる。

やばい、背筋が寒い。

「ほんまあかんでえ？ オンナノ口にそんな冗談は」

俺たちのあとに降りてきた男子生徒が、突如そう言つた。

天然パーマにたれ目が印象的で、よく言えば美形、悪く言えば間抜けそうな、そんな顔立ちだった。

「誰だ？」

「オレか？ オレはケンタロウ。まきはる牧原ケンタロウや。ケンタでもタロウでもどっちでもええで？」

馴れ馴れしいヤツだ。しかし、ケンタロウ……。どこかで聞いたような名前だな。

「えーと、なんだったか……。

「じゃああたしはケンタで」

「そうか。よろしくたのむわ！」

「いかん。ミコトがこの怪しい男のペースに乗せられている……」

しかし、なんだつたか……。

「あんたはDクラスでしょ？じゃああたし達と一緒に行動しない？」  
「？あれ、ここなんか。オレはてつきりAクラスや思つてきた  
んやけど」

「つ、まさかっ！？」

こいつはAクラスの中でも上位の男！

数々の魔王を、ダガーナイフ2本で沈めるといふ、  
「通り魔ケンタロウ！」

「お。オレのことしつとんか。嬉しいなあ」

その異名に似合わないきさくなひとがらと関西弁は、女子の間で  
も人気だとヤシロに聞いた気がする！

「なんであんたがここにいるんだ！？」

「いやあ、オレうつかりさんでな？Aクラスの飛行船と逆にあつた  
やつに乗つてももうたみたいなんや」

「なんて天然なの……」

あまりのアホらしさにミコトが絶句している。

「しかし困つたもんやな。一回先生にきいてみるわ。ほなさいなら

」

ケンタロウは手をふりながら、先生と真逆の方角へ走つていった。

「あれは天然つていうより方向音痴ね……」

同感だな。

俺たちは今、山小屋の掃除をしている。山小屋は10戸ほど。  
生活は山小屋で過ごすらしく、まわりには魔物よけの結界がはら  
れていた。

「せつたない部屋ね。もつヒマシなとじわなにのかしづり」  
わきからぶつぶつと「トドガ愚痴を言にながら、せひまで床を  
掃いでいる。

「しゃあないで」「トドガ。使われるんは一年に一回ひまつ語り話せ  
ケンタロウは今更Aクラスと合流することはできないうへ、D  
クラスの合宿にさんかすることになったらしい。

本人にとつては、どっちでもこい、といつた様子である。

「せや、部屋割りはオレとコウ君にしよう。それがええ! オレも知  
らんやつばつかで氣まずこんや」

「こきなりなにを言に出すかと思えば。とても氣まずうちはみえ  
ないが?」

「いや、ひやひや。気まずこからいへ、フレンチパンフレンチ明るくなるべ  
きやね?」

「……好きにしてくれ。あと、同室なら君つけはやめよ?」

ほんとうに明るいやつだな。

感心をとおりこしてあきれる。

「とにかく、早く掃除おわりせぬか?」

「はいはい」

「せやな。そうしょ」

なんだかんだいって聞き分けはいいよな、この2人。

掃除が終わると、もう夜になりかけていた。

晩飯の用意をするらしく、女子は調理班。男子は新集めとなつ  
た。

魔法をつかえば炎などすぐこでるのだが、九護先生から、

「お前らは魔法にたよりすぎだーそもそもお前らは魔法をまともこ  
扱えるのか!?」

という説教がとんだので、仕方なく従つこととした。

合宿まで九護先生がついてくるとさ……。Dクラスも信用されて  
ないもんだな。

とにかく薪だ薪。薪を集めるぞ。

「ユウはほんま熱心に薪あつめるなあ」

一緒に新集めをしていたケンタロウが、そつそつとやく。

「お前がどうしておれの妹をあんな風に見つけていたんだ？」

少なくともDクラスにはいしない。

そんなどうでもいい会話をしながら、薪を集め俺達。

「新は結構おちでやうなせんだが、  
子を嫌一ひのやうに思つたが、

「なんの話だ。Aクラスには新厚めが趣味のやつがいるのか？」

「どうせ」「トさん好きなんか?」

卷之三

「普通の友達だつ！」

「はーん、向かひながらが座こなあ

落ち着け俺。動搖しては、逆に不自然だ。

「深呼吸するか、普通」

ケンタロウはたれ目を細めながら笑っている。

「オレか？オレは女子なら誰で走大歓迎やー

……逆に「うギッパリ言わると反論しにくい。

物はこの作以て美ノヤカナシノ方翻訳ナシトスルモノ

「  
12才ぐらは?

「全然オッケー や！」

「いつはやばい。アブナイ人物ここにいたぞ、ミコト。

まさか通り魔ケンタロウの本性がこんな変態だつたとは。

「これをしつたら女子からの評判は、少しほは落ちるのだから。」

「まあ、女はこわいとこもあるけどな」

「今はお前のほうが怖いよ。」

「もうこの話はやめだ！薪集めに集中…」

「上手く話題そらしたな」

「ククッ、と笑うケンタロウ。」

Aクラスにも、変人っているんだな……。

薪集めを終えて山小屋にもどると、もうおこしやうなカレーがで  
きていた。

キャンプはカレーとまつてているのだろうか。カレーが嫌いなわけ  
ではないが。

よく見ると、カレー鍋は炎魔法で温められている。  
あれ……、薪集めた意味つてあつたのか？

「あ、カレーよそつてきたるわ。ちよつちまつときや～」

そういうて、ケンタロウは俺とミコトのぶんも、カレーをもつて  
きてくれた。

「よし、食べるか」

「いただきまーす」

「いただきます」

月がでている野外での食事も悪くない。

「このカレー、あたしも作つたのよ。美味しい？」

「ああ、美味しいぞ」

「普通にうまいで」

「ホント？ よかつた」

ミコトは満足そうに笑いながら、またカレーを食べ始める。  
本当、おいしいな。このカレー。

そのままパクパクと食べ進めていると、皿の前にスプーンが突き出された。

「…………あーんして」

こきなりの事態に、俺の頭上でハテナマークが浮かぶ。  
…………あーん、だと？

見ると//コトが恥ずかしそうにスプーンを向けている。  
いつたいどうこうことだ？

逆方向をみると、案の定ケンタロウがにじにじしていた。  
「ほれほれ、たべてあげなや」

ケンタロウが囁いてくる。

ここで素直に食べたほうがいいのだろうか。  
いや、恥ずかしがつては逆にケンタロウにバカにされる。

「…………あーん」

俺は素直にカレーをいただいた。  
やつぱり恥ずかしいもんだな。

つて、

「辛ああああああああああ！」

なんだこれは！のどが焼けるように痛い！  
まさかっ！

「ねえ、コウ？そのカレー、唐辛子とわさびとババロアいれてみた  
の」

「からしはいれんかつたんかいな」  
ケンタロウがくくくっ、と笑う。

笑う暇があつたら水をわたせよつ！  
くそつ、なんでだ！？俺がなにか怒らせるよつなこと……、

「コウ…………」

「な、なんだ？ ケホツ」

「少しば朝の発言、反省した？」

…………ケンタロウ、女つて怖いな。

「おっ？ あっちから美味そうな臭いがするね  
夜の闇のなか、森のなかにたたずむ一人の影。

「そういやおなかへつたなあ……」

影は、はあ、とため息をつき、座り込んだ。

「よし、夜中にいただきにいこう！」

立ち上がり、大きく伸びをする影。

そして

「まずは君たちを殺してから、ね」

茂みに隠れていたゴブリンたちにむかって、手をかざすのだった

…。

梅雨合宿1日目（後書き）

今回の話、いかがだったでしょうかー。  
オチから考えたわけではありませんが、結果として上手くはいせ  
たのではないか、と思います。

次回は梅雨合宿2日目。  
怪しい影の正体が、そろそろあきらかになるでしょーか。  
次回、お楽しみに！

長いあどがきは、まだ書けません。あしかばら。

もう6円とはいえ、山小屋の朝は肌寒いものだった。

俺は毛布を被り直そと、地面に敷かれた布団の上で寝返りをうつ。

だが、体が少し重たい。

というより、なにかが俺の体にのしかかっているようだ。

「むう、ハーレム……、むにゃむにゃ、ラブレター、下駄箱……」

欲望をそのまま表したような単語の数々が、耳元から聞こえてくる。

この部屋には俺を含め2人しかいない。

つまりこの声は……

「ケンタ……ロウ？」

目を開けて首を少し傾けると、視界にケンタロウの寝顔がはいつてきた。

なんともまのぬけた寝顔である。

しかし寝ているケンタロウは、たれ目のせいでアザラシみたいだ。魔物のせいで絶滅危惧種になつたアザラシをこんなところでみれるとは、もう思ひもよらうそつくりだった。

「うんじょっ、と」

俺はそのアザラシ起こさないようこ、布団から這い出た。壁にかけられた時計は5時を指している。

他に誰か起きてないかな、そんな気持ちで俺は寝起きのジャージのまま外にでた。

外は閑散としていて、鳥の鳴き声が少し聞こえるくらいだった。

そして外には、ミコトがいた。

何をしているんだ。

「おい、なにしてるんだ?」

「……なんだ、あんただつたの。

トレーニングよ。あんたに負けでられないからね」

「ふーん、頑張ってるな」

こんな朝早くから練習するなんて……。少し見直した。  
俺はしばらく近くにあったベンチで、ミコトの練習をみる」とこ  
した。

「別に見てもう必要はないんだけど」

そういうながらミコトは、ハンドガンを一丁とりだした。  
たぶんモデルガンだろうが、なかなか本格的である。  
それにもかかわらず銃を使うのか。見かけによらずかつこいいな。

ミコトは抜き打ちの練習や的当てを数分行い、休憩にはいった。

「ふう、疲れた……。なんか飲み物ない?」

「とつてこようか?」

「大丈夫よ、別にそこまで飲みたい訳じゃないわ」

「立つてるままじゃ疲れるだろ。座れよ」

俺はベンチの端っこに移動し、スペースをあけた。

「……じゃあ、遠慮無く」

反対に座るミコト。

辺りは静寂に包まれていた。

ミコトからはなしかけるわけでもなく、俺が話し始めるわけでも

なく、ただ静かな時間がすぎていった。

遠くから聞こえる鳥の声が、妙に大きく聞こえた。

合宿2日目の中は、森にはいつての戦闘訓練だ。

俺は今、ペアと森の中に入っている。

内容は、夕暮れまで森で生き延びる、とのこと。

一応、発煙筒や携帯など逃げるための荷物は持たされたが、ほと

んど自力で戻つてこなければならぬ。

そして俺のペアはといふと、

「よつしやー やつと戦いか！」

ケンタロウである。

一番交流のあつた俺が適任だと思われたらしい。

まあ Aクラスだから、頼りにはなる。

「しつかし、この辺はゴブリンとかがおもな魔物やつたと思つけど

……」

辺りを見回すケンタロウ。

「別にわざわざ戦闘しなくともいいだろ？ 適当にふらふら歩いて

時間つぶそう」

「……案外不真面目なんやな」

戦つて疲れるのは嫌だし、ゴブリンがかわいそ、と思つのはおかしいだろうか。

「別におかしくはないやろ。弱いモノいじめになつたら、人間のほうが魔物みたいになる」

ケンタロウは俺の意見に首肯している。

「ま、とにかく今は夕暮れまで生き延びよ！」

俺はそういうて、歩き始めた。

ケンタロウの戦い方は、スマートなものであつた。  
ゴブリンに気づかれるやいなや、ダガーナイフを取り出し、わめかれる前に一撃でしとめる。  
まさに“通り魔”のあだ名がふさわしいモノだった。

「ゴウは戦わんのか？」

「お前が全部仕留めちまうんだから、手のだしあうがない」  
俺は苦笑しながらそういった。

「ははっ、その通りやな。

でもユウは弱いわけじゃないやろ?」

「……なぜそう思う?」

「なんつーか、こいつ、ただならぬ魔力みたいなんを感じるんや。

あふれ出るオーラ、みたいなもんか」

俺は意表をつかれた。

ケンタロウのことを、少し見直さなければならない。

俺の能力を感覚で感じ取つた人間は、ケンタロウだけではないだらうか……。あ、九護先生がいたか。

そんな思索にふけつていたからだらうか。

俺はいつのまにか裏をとられていた。

「つー?」

俺は現実に意識をもどし、その気配から遠ざかる。

俺のいた場所には、少年がいた。

……ちこせな少年が。

「……君は?」

ナイフをとりだしていったケンタロウが問いかける。ナイフもうしまえよ。

「とおりすがりの少年、だね」

少年は笑いながらいった。

「何故ここにいる?」

ケンタロウはナイフを構えたまま、また問いかける。

おいおい、ナイフはいい加減にしまえよ。

そう俺が言おうとしたときだった。

「君たちと、戦うために、かな」

少年はそういうやいなや、手をケンタロウの方に向け、紫の弾を放つた。

「なつー?」

ケンタロウがのけぞる。

ナイフはケンタロウの手を離れ、放物線を描きながら地面へと落  
下し、土に突き刺さった。

今は……、魔法！？

「……弱いね。すこく弱い。こんなじや全然楽しくないよ」

少年は咳く。

一体、何者なんだ……？

「人間なんてそんなものですよ。さあ、早くどどめを  
森の奥から、新たな声が近づいてきた。

誰だ？

「クルトス、ここには生かしておくれよ。もつと強くなる気がするん  
だ」

「ならそちらの男は？」

クルトス、と呼ばれた少年の2倍ほど背丈の男が言った。

俺のほうを指さして。

「……お前らの目的はなんだ？」

俺はそう問いかけた。

声は震えている。

恐怖ではなく、怒りで。

「私たちの目的は世界征服です」

「いや、俺様は違うよ？ ただ強いヤツと戦いたいだけさ」

男と少年が言い争っている。

「一体ここからの正体はなんだというのだ……。

「とにかく、君。俺様と戦ってくれよ。不意打ちなんてしないから  
さ」

「さっきのは不意打ちやないんか？」

ケンタロウは苦笑しつつもう一本ナイフをだし、戦闘態勢をと  
つている。

「戦うしかないのか……。

「こいつは私が」

クルトスという男がケンタロウのほうを向いて言った。

「うん、いいよ。俺様はこいつと戦うから」

「だつたら……」

先手必勝！

「こつちからいかせてもらおうー！」

俺はポケットからライターととりだし、呪文を唱えた。

俺と少年の間に、大きな爆発がおきる。

それを合図として、戦いの火ぶたがきらされた。

「甘いよ！ もつと本気できなよ！」

少年が次々と、紫の弾を放つてくる。

「ちつ！」

俺は紫の弾を氷の壁で防いだ。

氷の消費が激しいが仕方ない。

ケンタロウ達は、離れたところへいつのまにか行っている。

戦いを混戦にしないためだろう。

だつたら、大技を使つても大丈夫だ。

「悪いが終わらせる！」

俺はスタンガンを取り出し、雷魔法を唱えた。

辺りに稻妻が落ちる。

「つひやー！ すごいなオイ！ 人間とは思えないよ！」

少年は、少し余裕のある動きで稻妻をかわしながら叫んでいる。

これもよけられるのか……。

「フリーダム マジシャン  
自由の魔術師だね！？」

こんなことができるのは…！」

俺の能力を一発で見破るところを見ると、やはりただの人間ではないようだ。

「魔物、か？」

「少し違うね！俺様は人間が作り出した魔物！人造魔物さー！」

少年はそういうながら、さつきより大きな紫の弾を形成する。

「別に世界征服なんてどうでもいい！」

戦うことが俺の生き甲斐！生み出された意味！

「だからといつてっ！」

俺は紫の弾を防ぐために、氷の壁を再度形成する。

「俺様は証明する！」

俺様を作った人間に！

母さんに！

俺の存在意義を！

少年は叫び、そして紫の弾を撃ち出した。

それは、氷の壁などいともたやすく破壊し、俺にせまる。だが……、

「ぬるいな」

俺はとつさに氷の壁を5枚同時に作り出した。

紫の弾は、5枚の壁に阻まれ、爆発を起こした。

「……こんなものか？」

俺は苦笑する。

それは嘲笑も混じっていた。

「なにがおかしいっ！」

「お前になにがあるのかはしらんが、相手は選ぶべきだ」

俺はそういうって、地面に手を当てた。

「どういう意味だ！」

少年は顔を真っ赤にして怒鳴り散らす。

もう子供同然だ。

「こういう意味だ」

俺はそういうと、呪文を唱えた。

地面が隆起し、少年の周りに土の壁ができる。

そしてそれは少年に向かつて倒れかかった。

「こんなものでっ！」

少年はその場から離れ、直撃を受ける。

だが、

「それで終わりだと思うな」

俺は近くにあった木に手をあて、呪文を再び唱えた。木の根が少年に伸び、からみつく。

「つー？ クソツッ！」

少年は抜け出そうともがぐが、根はさらにからみつくばかりだ。

「詰んだな」

俺はライターをとりだし、少年の前に近づけた。

だが、魔法は唱えない。

「なんだよ！ 早くとどめをさせつてんだ！」

「……お前を殺す理由が見つからないんでな」

そういうと、少年はあっけにとられた表情で俺を見つめた。

「……自由の魔術師だけじゃないんだな？」

「お、そこまで分かるのか。一体何者だよ」

「だからいつただろ、人造魔物だつて」

少年はもう開き直った様子でそう答える。

「お前の名前はなんだ？」

「ファイター『戦う者』、それが俺様につけられた名前、だつたようなきがするよ」

少年、ファイターはそういうと、大きくため息をついた。

「俺はユウだ」

「そう……。

初めてだよ。あんたみたいな人間は……。

俺は生み出されてから実験ばかり。

あげくの果てに封印だなんて、ばかげてる……」

「だが、世界を征服したところで、お前の求めるもの手に入らない

「ははつ、なんでもしつたような口調だね」

さて、一度先生に連絡を

そのとき、視界をジェット機のように影が通り過ぎた。

飛んでいった方を見ると、ケンタロウが転がっている。

「大丈夫か！？」

「おやおや、困りますねえ。世界征服は行つてもらわないと  
ケンタロウがとんできたほうから、クルトスが歩いてきた。  
「クルトス……、今回も裏切る気か……」

「ははは！　あなたはいい君主でしたよ。同時に、扱いやすい君  
主でしたがね」

クルトスはそういうと、大きな剣をとりだした。

突然だしたということは、魔力で形成されたものだろうか。  
ケンタロウが負けたということは、相当強いのだろうか。  
「さて、役立たずの君主には死んでもらいましょうかね」

クルトスが剣を振り上げる。

仕方ない。ケンタロウの前だが、自然魔法を唱えよう。  
俺はクルトスに向かつて魔法を唱えようとした。  
だがその必要はなかつた。

なぜなら……、

「鉄拳！」

クルトスの頬を、鉄拳がとらえたからだ。

クルトスは吹き飛ばされ、木に頭を打ち付ける。

そして、起きあがろうとしたところを数人の男達に取り押さえられれた。

「お前らあ！　また派手に暴れおつてえ！」

鉄拳の主は、九護先生だった……。

結局その日は全員がキャンプ地に撤退。

ファイターは鉄拳の衝撃で根から抜け出していたらしく、もうい  
なかつた。

結局あいつはなにがしたかったのだろう。

そして俺たちはといふと……、

「人造魔物、か」

「はい、見かけは少年でしたが、人間離れした魔法の使い手でしたね」

「俺の相手は普通の魔物やつたらしいけどなあ」

事情聴取の真っ最中であった。

ケンタロウは怪我をしているため、ベッドにのつたままである。人造魔物は九護先生でもしらないらしく、校長に聞けばなにかわかるかもしれない、とのことだったが、実際には迷宮入りだ。

「とにかく、ケンタロウは絶対安静だ。明日の釣りなど行かせられん！」

「嘘やろー！」

「……やれやれ」

結局ファイターは何者であつたのか。  
俺はそのことだけが、気がかりだつた。

「さて、晩飯を作る時間だ。

薪集めは危険だから今日は中止。

女子を手伝ってくれ

「分かりました」

「ケンタロウはベッドからではならんぞ」

「そんなん……」

「あとユウ、ちょっとこいつちこい」

「？ なんですか？」

俺は九護先生に近づく。

「お前らの戦闘場所に、根が張り巡らされてたり、地面が隆起したりしていた。

お前、なにかしつてるか？」

知つてゐるもなにも、俺の魔法である。

だが、

「……知りませんね。戦闘でえぐられたんじゃないですか？」

自然を操る魔法というのは、現在確認されていませんし、なにより自然物を魔法に仕様することは不可能です」

「いや、分かつてはいるが、辺りに魔力が散らばっていたのでな。魔法に関してAクラス並のお前なら、なにか分かるとは思ったが

……。

まあいい、今田はゆっくり休め」

「では、失礼します」

合宿2日目は、こうして終わろうとしていた……。

「イタタ、まだ腰が痛い……。

しかし、世界って広いなあ。俺様より強いやつなんて、いるんだもんなあ……。

……よし、決めた！ 俺様は世界を巡って修行して、ユウにリベンジする！」

もう夜も深い、真っ暗な森で、小さな少年はそう決意した。

梅雨合宿2日目（後書き）

うぐぐぐぐ、バトルシーンは難しい……。  
しかも主人公が予想以上に強かつた……。  
自分で書いてるんですけどね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8275w/>

---

勇者のまなびやっ！

2011年11月20日11時19分発行